
東方邪黒蛇

白と黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方邪黒蛇

【Nコード】

N3767BA

【作者名】

白と黒

【あらすじ】

あっちへスルスルこっちへスルスル。

小さな身体で好奇心のままにのらりくらりと動き回る。

自分の気持ちに正直な、奇妙で愉快で偶にはホロリ、そんな話ですが是非とも見ていてくださいな。

一話：のらりくらりと始まる（前書き）

どうも、白と黒です。

これは東方凶鳥記とはまったく関係ない話になっていると思いますので、それを承知した上でお読み下さい。

一話：のらりくらりと始まる

回りからはよく変な子供と言われていた。

自分と同じ年の子供が遊んでいても、それに混ざらずに飛び回っている羽虫を追い掛け回したり、子供なのに親の仕事の手伝いをしたり、普通の子供とは違う事をして過ごしてる。

言ってしまうば、自分は人一倍好奇心が強かった。

誰もがやらないような事をやりたがり、誰もが知りたがらないような事を知りたがり、そして誰よりも面白いものには目がない。

でも、改めて思うと自分はやっぱり見た目どおり子供だったんだなあと思ってしまう。

力だってその辺の子供と変わらないし、頭だって少しいくらい。でもやっぱり周りから見たら変わった子供。

今日も今日とて遊びに誘われたと言うのに、それを断って湖の近くで見つけた蛙をしゃがみながら静かに見つめている。

「蛙、蛙。アンタに名前はあるのかね？」

蛙はそれ聞いているのか聞いていないのか、ゲコーと大きく鳴くとまた何もしないでその場に留まる。

偶に指で突付いてみるけど、鬱陶しそうに鳴いたり手で払いのけたりするだけで、やっぱりそこから動かない。

そろそろ行った方がいいかな？ そう思って立ち上がる。

「じゃあね、蛙。また会おうね」

こちらを見上げている蛙にそう言つて、最後に小さく手を振る。
蛙はそれを見ると、今まで殆ど動かなかったのに、脚で地面を蹴つて湖の中に飛び込んだ。

蛙でも言葉がわかるんだね。始めて知つたよ。湖に飛び込んだ蛙を見送つて、後ろを向いて歩を進める。

今日もあの人はいるのかな？

それは傍から見ればとても立派な神社だろう。

大きな鳥居はあまりの大きさと高さに見上げていると首が痛くなり、本殿は鳥居に負けず劣らずで普通に暮らす分には大き過ぎだ。

その本殿の入り口で、一人の少女がつまらなそうな顔をしながら縁に座っている。

金髪の髪で両端を赤い紐で縛っており、頭にはギョロリと真ん丸い目玉のついた帽子。

青い服に、真っ白で少々垂れ下がっている袖。下にはこれまた服と同じで青い、ミニスカートのような物を穿いている。

また、着ている服にも穿いている物にも、どちらにも二足歩行の蛙が描かれている。

「あ、いた」

俯きながらつまらなそうに足をプラプラさせていた少女は、声が聞こえた途端にバツを顔を上げた。

そこにいたのは小さな少年。
年は10にも満たないほどで、黒くそれなりの長さの髪を縛って一つに纏めている。

服は、膝より少し下まである和服の着ていて、草鞋を履いている。

その少年が笑顔で少女に小さく手を振っている。

少女は嬉しそうな顔をしながら手招きする。すると少年も笑顔のまま少女の目の前まで近づく。

「こんにちは、洩矢さま!」

「はいはい、よく来たね。座ったら?」

少女、もとい洩矢はそう言いながら自分の横をポンポンと叩く。

少年は少し躊躇ったが、言われるがままに洩矢の横に静かに腰を下ろす。

「それにしても暇だよねえ。態々こんな場所に来るなんてさ」

「前にも言いました。面白いものがある場所なら自分の足で見に来ます」

「ふう〜ん……でもせめて口調くらい子供っぽくしたら?」

「……あのですね、神様の前じゃしたくても出来ないんですよ」

忙しなく動いている少女の足は、まるで尻尾を振っている犬のようにわかりやすく、実に楽しそうだ。

少年は溜息を漏らしながらも、その顔は洩矢と同じでとても楽しそうに見える。

「別に、私が神だからって、そんな事気にする必要はないんじゃない?」

私としても、そっちの方が気楽だしね。そもそも、供物もなしにた

だ神に会いに来てるだけでも不味いんじゃないの？」

「……それもそうだね。やっぱり俺にはこっちの方がいいや」
「そうそう、いつも通りいつも通り」

そう言い、二人は笑う。それはそれは楽しそうに……

「……ん……ふぁ……よく寝た」

寝すぎたのかな、頭が痛い。

どれくらい寝てたかなあと思いつつ辺りを見わたす。

少なくとも先程は夕暮れで、今は辺りがとても暗くなっているの
でそこそこ長い間眠っていたんだと思う。

「嫌な夢……」

今は昔、何て言っても、この身体になってからまだ6年ほどしか経
っていない。

前までは恋しかった故郷も、今はこの身体で生き残る方法しか考え
てないから別に見に行きたいだなんて思っていない。

それに、帰ったところで居場所もないし、寧ろ命を狙われるのが当
然じゃないかな。

弱い俺じゃ幾ら頑張っても蛙や鼠程度にしか勝てないだろうし、ま
だ馴染んでる訳じゃない。

「……そう言えば腹減ったなあ」

そう呟きながら、首を動かして餌になりそうな生き物を探す。やっぱり少し不便かな、この身体。

見たところ餌になりそうな生き物もないので、諦めて今度は自分の身体を動かして餌を探しに行く。

今朝は変な木の実だったから、夜は肉を食べたい。何の障害もなく、自分の身体がまるで滑るように草の上を進む。

「お」

そして見つけた鼠。アレくらいなら俺でも狩れるかな。なるべく気づかれないように身を低く、そして音を発てないようにしながら草の上を進む。もう少し、もう少し……

「——シャア！」

鼠との距離が充分近づくと同時に、口を開けて鼠に飛びつく。

行き成りの敵に驚いた鼠は逃げようとしたが、既に俺が胴体に食らいついてもう逃げる事は出来ない。

さらに、生えている鋭い歯のうち、他のより少し伸びている二つの牙で鼠の身体を貫く。

ピクリと動かなくなった鼠から口を離し、少しずつ齧って食している。骨くらいなら大丈夫、そのまま飲み込めるから。

さて、もうわかったかな。俺の正体は——

「ん〜。やっぱり丸ごと呑み込むのは無理かね」

——蛇だ

それもただの蛇ではなく、小さな、それこそその辺に落ちている木

の枝と同じくらいの長さで細さの黒い蛇。

目は赤く、夜の狩りでは下手をすると獲物に逃げられてしまうが、瞑ってしまえば気づかれずに獲物に近づいて捕らえる事が出来る。身体が黒いから夜に紛れやすいのかね。

「んぐ……うん、いつ食べても不味い」

個人的には少なくとも茹でるか、もしくは焼くかしたいけどこの身体じゃ出来ない。

贅沢は言ってられないから悲しいよ。

最初の方は酷かった。

お腹が減ってもどうしたらいいかわからなかったし、始めて捕まえた蛙も戻してしまった。

しばらくは木の実だけで我慢していたけど、やっぱり元人間としては獣肉とか魚は食べたい。

命を奪うのは躊躇うが、最近じゃそこまで気にしなくなってきた。だって食わなきゃ死ぬから。

俺だってまだ死にたくはない。

今までだって、この身体になってからは生きるためなら大抵の事はやった。

綺麗な水がなければ泥水を啜ったし、ちゃんとした食べ物がいなかったら腐った動物の死骸だって口にすることもあった。

そこまでやったのは、全部が全部生きるため。

要はつまり、死ぬのが怖かった。

死んだらどこに行くのかもわからないし、何よりも死んだら面白いものが見れなくなるかもしれないし。

面白いものが好きな自分としてはそれは困る。

さて、そんな事を考えている間に、鼠はすっかり胃に収まって腹も膨れた。

見ると朝日も昇っており、辺りを薄く照らしている。

うん、もうそろそろ行こうかな。

朝日を見ながら目を細め、今度の目的地をどこにしようか考える。

「……いつもどおりのらりくらり、ってね」

遠くを見てそう呟き、少し膨らんで動きづらくなった身体を引きずって進む。

今日はどこに行けるかな。

さてさて今から始まるは、この小さな蛇の、小さな、それでいてくだらない物語。

それでもよろしければ、皆さんお手を拝借致します……

一話：のらりくらりと始まる（後書き）

今回は、始めだったので短めです。

おそらく、何人かの方は前の小説を更新してくれと思っているでしょう。

けれども我慢してください。キツパリ忘れろ、何てことは言いませ

ん。
これを読む時は、あの小説とはまた違う話なんだなあ と理解してください、お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3767ba/>

東方邪黒蛇

2012年1月9日21時59分発行